

時代の「悲哀」としての「少年の悲哀」

— 国木田独歩「少年の悲哀」と李光洙「少年の悲哀」 —

丁 貴 連

一、「追憶文学の季節」と独歩の「少年もの」

古今東西を問わず、過去としての幼少年時代を回想する文学は数多く存在する。それは人間には、自分の幼少年時代を回想し、それが非常に美しい時代だったと、人に伝えたいという欲求があるからである。しかし、過去を回想するということは、つまりそれだけが暗鬱な時代だということでもある。なぜなら、人は希望に満ちあふれたり、明るい未来が展望できる時には過去を追憶などしないからである。かつて高村光太郎は一九一〇年代の「追憶文学」の流行に関連して次のように述べている。

多くの矛盾と、重圧とに堪へきれない今の世の空気の中で、追憶は一種の避難所である。風に当たる露台である。一時的のレフレッシメントではあるが、文芸が、時に眼前の世界から遁れて、追憶に足を入れるのも止み難い傾向であらう。青簾を透かして、日光を見るやうな美しい世界は、追憶の情操の中に容易く見出されるのである。¹⁾

高村光太郎は「多くの矛盾と重圧」に満ちた時代状況の中で、文学が心の「避難所」を求めてつかの間、甘美で懐かしい追憶の世界へ逃げることもやむを得ないと言っている。千葉俊二氏はそれを敷衍して、日露戦争後の文学の底流に追憶文学の流行があったと指摘している。²⁾ 千葉氏によれば、一九一〇年代はまさに「追憶文学の季節」であったと言えよう。一九一〇年代に書かれた追憶文学には、小川未明の諸作品をはじめとして、寺田寅彦『竜舌蘭』『森の絵』、中村星湖『少年行』、小山内薫『十三年』、北原白

秋『思い出』、木下杢太郎『波高き日』『珊瑚珠の根付』、永井荷風『狐』『下谷の家』、後藤末雄『推移』、谷崎潤一郎『少年』、水上瀧太郎『山の手の子』『ぼたん』、久保田万太郎『浅草田原町』、森鷗外の『キダ・セクスアリス』、それに鈴木三重吉の諸作品などがある。³⁾ こうした追憶文学が集中してあらわれた背景には、一九一〇年代という時代状況、すなわち一九一〇年の日韓併合と大逆事件によって、対外的には日本が侵略的帝国主義の立場を露にし、国内的にはきびしい思想弾圧を行うような社会状況（石川啄木の言う「時代閉塞の現状」）があった。⁴⁾ つまり、作者が自らの幼少年時代を追憶、なしいは回想するその背景には暗鬱な時代状況があったというのである。ところで、こうした一九一〇年代の追憶文学の流行を論じるに際に国木田独歩は、泉鏡花とともに決して看過できない存在である。それというのも、一九一〇年代の一連の追憶文学に先だつて独歩には幼少年時代を追憶する文学があまりにも多いからである。

「詩想」(二八九八)「少女」(二八九八)「鹿狩」(二八九八)「初恋」(一九〇〇)「画の悲しみ」(一九〇二)「少年の悲哀」(一九〇二)「指輪の罰」(一九〇二)「日の出」(一九〇三)「非凡なる凡人」(一九〇三)「馬上の友」(一九〇三)「山の力」(一九〇三)「春の鳥」(一九〇四)「泣き笑ひ」(一九〇七)。⁵⁾

このように独歩には初期から晩年まで、いわゆる「少年もの」と呼ばれる作品が十三篇もある。とりわけ中期にもっとも多く、一九〇二、三年に(明治三十五、六年)集中して現われている。一九〇二、三年といえ

独歩がもっとも充実した創作活動をしていた時期で、のちに作家としての名声を高めた作品集『運命』（一九〇六）に収められた諸作品はすべてこの時期に書かれたものである。しかしまた同時に、当時は彼の不遇時代でもあり、実生活上ももっとも苦しい時期であった。すなわち、一九〇一年六月に星亨が暗殺されたことが契機となって、民声新報社を退社した独歩は、同年十一月から翌一九〇二年にかけて、妻子を妻の実家に預けて西園寺公望邸に寄寓したり、鎌倉坂ノ下の権五郎神社境内で斉藤弔花らと自炊するなど、綱渡り的にも言える窮乏生活の中で創作活動に専念していた。この時期に「少年もの」がもっとも多く書かれたということは、「時代閉塞の現状」ではないせよ、独歩が如何に生活苦にあえぎ、暗鬱な気分に関ざされていたかを物語っている。

ところで、韓国の近代文学に眼を転じると、一九三〇年代後半に過去への回帰ないしは郷愁、憧憬といった回想形式が文壇に流行していたことが注目される。一九三〇年代に韓国の作家たちの間で美しかった過去を回想したり、追憶や郷愁に浸ったりする回想風小説が流行したことは決して偶然とは言えない。なぜなら、この時期は韓国の近代文学において「冬の時代」といわれる植民地支配の末期であり、一九三二年の満州事変を境に日本の植民地政策が過激さを増し、内鮮一体という名の下に、朝鮮語の使用禁止と創氏改名を強要し、徴兵令を実施して韓国の青年と学生を強制的に日本軍に編入して戦わせた。また神社参拝を強要することによって、言論はもちろん精神の自由さえ剥奪する一連の野蛮な行為がすべてこの時期に行われていたからである。つまり、「多くの矛盾と重圧」に満ちた厳しい時代状況だからこそ多くの作家たちは心の「避難所」を求めて幼少年時代への追憶の世界へ、あるいは過去に対する郷愁の世界へと逃げこんでいったのである。

崔柄宇氏の考察によれば、一九三〇年代後半の回想文学としては、姜敬愛の「煩惱」（一九三五）、兪鎮午の「滄浪亭の記」（一九三八）「馬車」（一九四一）「行路」（一九四一）、安懷南の「故郷」（一九三六）「瞑想」（一九三七）、趙碧岩『新しい倫理の一節』（一九三七）、蔡晚植『巡査のある日曜日』（一九四〇）、金南天の「オデイ」（一九四一）などがあげられる。これ

らの作品にはいずれも植民地末期の暗鬱たる現実から目を背け、遠い過去と会話をかわそうとする作者のノスタルジアが強く感じられる。このような植民地末期の追憶文学のあり方は、石川啄木のいう「時代閉塞の現状」下における出口のない暗鬱な気分から「現実を無化」する手段として無垢な子供時代の追憶を語ろうとした一九一〇年代の日本の追憶文学と相通するものがある。

ところで日本の追憶文学の流行に独歩の一連の「少年もの」が影響を及ぼしていることはすでに述べた通りであるが、その独歩の「少年もの」が韓国の近代文学にも影響を及ぼしていたことは注目に値する。たとえば、李光洙の少年ものの代表作として知られている「少年の悲哀」（一九一七）が独歩の「少年の悲哀」「画の悲しみ」「馬上の友」の影響を受けていたことはすでに早い段階から指摘されているが、そのほかにも「幼き友」（一九一七）と「献身者」（一九一〇）に、独歩の「おとづれ」と「日の出」がそれぞれ影響を及ぼしている。田榮澤の「白痴か天才か」（一九一九）が独歩の「春の鳥」の影響を受けていたことも拙稿「他者を写し取る一人称観察者視点形式」と「愚者文学としての『春の鳥』」において指摘した。そして、兪鎮午の「滄浪亭の記」（一九三八）にも独歩の「少年の悲哀」の影響が見られる。

このように独歩の「少年もの」は韓国の近代文学における青少年期を扱った作品にも影響を及ぼしているが、中でも「少年の悲哀」は、朝鮮に流れていく一人の娼婦を憐れむ少年が描かれていることもあって、当時の韓国の若い読者に親近感を与えたと思われる。それを裏づけるかのように、「少年の悲哀」は二人の韓国文学者によって二十年の歳月の後、二度にわたって韓国文学に受容された。一九一七年に発表された李光洙の「少年の悲哀」と、一九三八年の兪鎮午の「滄浪亭の記」とがそれである。この二人の作家は独歩の「少年の悲哀」の影響を受けてそれぞれの少年時代の体験を回想しながらも、まったく異なる描き方をしている。すなわち、啓蒙作家として常に韓国の民衆を指導してきた李光洙は、少年時代の悲しい体験の背後に隠れている封建社会の矛盾に対する鋭い批判を行っている。一方兪鎮午は植民地末期という厳しい時代状況の中で、美しい幼少年時代を回想するこ

とよつて、現在の暗鬱な状況を間接的に浮き彫りにしている。こうした相違はいうまでもなく一九一〇年代と一九三〇年代という時代状況の違いによるものと思われるが、幼少年時代を追憶する文学がいかに時代状況と密接に関わっているかが、逆に韓国の読者の反応によつて浮き彫りにされたとも考えられる。

しかし皮肉にも独歩の「少年の悲哀」は発表当初は「作は拙劣読む可からず、筆の稚氣ありて乳臭を脱せざる、尋中の二三年生さへ、此れ程の悪文は作られる可」(『帝國文学』一九〇二・九)と酷評されるなど、評判はよくなかった。ただ、こうした発表当時の日本文壇の評価とは裏腹に、この作品は韓国の作家たちの間では人気があり、二人の作家の作品に影響を与えたばかりでなく、同名の小説まで作らせていた。この事実は独歩文学の新たな評価を考える上において決して看過されてはならない問題であろう。そこで、本稿では独歩と李光洙の同名小説「少年の悲哀」をとりあげて、李光洙がなぜ同名小説「少年の悲哀」を執筆したのかを、独歩の作品との比較を通して明らかにすると同時に、従来少年時代の感傷的な思い出を綴った「少年もの」の代表作と言われていた「少年の悲哀」を、中島礼子氏がなぜ「当時の社会への鋭い批評性をこめた小説」であると評価しているのか、その意味を李光洙との比較を通して問いなおしてみたいと思う。

二、「少年の悲哀」と「少年の悲哀」

李光洙が独歩の作品をかなり若い頃から読んでいたことは、回想文や日記に少なからぬ記述がみえることでわかるが、具体的にどのような作品を読んでいたかについては実は明記されていない。ただ独歩のいくつかの短編集を耽読したということが断片的に知られるだけである。李光洙の留学の時期および読書歴との重なりからいって、一九〇五年発表の第二作品集『独歩集』と翌一九〇六年の第三作品集『運命』がそのなかに含まれていたであろうことは十分に考えられるが、実はこの二つの作品集には、いわゆる「少年もの」と言われる作品が数多く収められている。「少年の悲哀」「画の悲しみ」「馬上の友」「春の鳥」「非凡なる凡人」「山の力」「指輪の罰」の

七作がそれである。これらの「少年もの」は「山の力」と「指輪の罰」を除くすべての作品が小説としても優れたもので、「春の鳥」「少年の悲哀」などは名作として評価されており、独歩の作品の中でも光彩を放っている。独歩は創作活動が充実していた中期に少年ものが目立って多いのだが、偶然にもこの中期の作品が当時の韓国の留学生たちにもっとも多く読まれていたのである。親もとを離れて異国の地で一人寂しく暮らしていた多感な十四、五才の留学生たちは、独歩の「少年の悲哀」や「春の鳥」「馬上の友」「画の悲しみ」などの少年物がくり広げる作品世界に自分たちの境遇を重ね合わせ、あたかもそれを追体験するかのように耽読していたのではなからうか。とくに、なかば孤児のような境遇で、感傷的な中学生生活を日本で送っていた李光洙にとっては、独歩の少年ものは自分の少年時代とびつたり重ね合うものであっただろう。それゆえに、後年創作の筆を執るようになったとき、独歩の少年ものから多くのヒントを得て、自己の幼少時代を追憶する作品を書くようになったとみられる。「幼き友へ」(一九一七)「少年の悲哀」(一九一七)「尹光浩」(一九一八)「彷徨」(一九一八)などは、いずれも李光洙が二十五、六才の頃、少年時代の孤独な心情を回想して描いたものであるが、「少年の悲哀」はその題目からも、独歩の作品との影響関係が取りざたされている。確かに両作品は、第一に少年時代の悲しい出来事を大人になって追憶していること。第二にワーズワースに触れていること。第三に田舎の叔父の家を小説の舞台として設定していること。第四に悲しい姉弟、あるいは兄妹愛を取りあげていること、第五に小説の結末が共通しているといった点で類似性を指摘することができる。そこで、両者を具体的に見ていくことにする。

まず第一に、両作品ともに無垢な少年の目を通して冷酷な現実によつて断ち切られた愛する者同士の別れを回想的に描いていることが指摘できる。独歩の「少年の悲哀」では、主人公が十二才の時、下男の徳二郎に誘われて行ったある遊廓で、唯一の肉親である弟や愛する男と引き裂かれて娼婦として朝鮮に渡ることになる女との出会いと別れを、十七年経った今日でも忘れられないと回想している。それに対して李光洙の「少年の悲哀」は、従妹との淡い恋が封建的で因習的な結婚制度によつて破れたことを、一児

の父親になってから回想する作品となっている。つまり、両作品はともに無垢な少年の目を通して、愛する者同士の別れという人生の悲しみを回想的に描いたという点において類似している。

第二に、両作品にはともに、ワーズワースのことを語るくだりがある。独歩の「少年の悲哀」では冒頭部に主人公に次のように語らせている。

僕は僕の少年の時代を田舎で過ごさして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない。若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は余程違つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智恵は今よりも進んで居た代りに僕の心はワーズワース一卷より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつた^⑩だらうと信ずる。(四七五頁)

多感な少年時代に田舎で暮らすことによつて、ワーズワースの書物でも得られない自由な心を持ち得ることができたと主人公は自負している。一方、李光洙の「少年の悲哀」では、知恵遅れの男と結婚が決まった従妹蘭秀を助きたい一心で、主人公は蘭秀と一緒にソウルへ逃げようと誘うのだが、その時、主人公は、

「このばかり」と言いながらも涙がこぼれそうだった。そして、惜しい詩人がとうとう一人いなくなるのを嘆いた。また、自分が最も好きだった妹を他人に奪われるのが悔しくてたまらなかつた。まるで英国詩人ワーズワースがその妹と一生を共に過ごしたように、自分も蘭秀と一生をともに送りたい^⑪。 (一一二頁、拙訳以下同)

と、ワーズワースのように妹と一緒に暮らしたいと願いを言うのである。このように、両作品がともにワーズワースを引用しているところに類似性を感じられる。ただ独歩の「少年の悲哀」では、冒頭の四行が「少年の歓喜が詩であるならば、少年の悲哀もまた詩である。自然の心に宿る歓喜にして若し歌ふべくんば自然の心にささやく悲哀も亦歌ふべきであらう」とあるように、「少年」の「悲哀」がこの作品のモチーフであることを明らかに

にすることからはじまつて、そのリフレインをつらねることによつて、作品の主題である人生の別離を少年の眼を通してみつめる構成になっている。つまり、別れという人生の悲しみを、悠々たる自然と対比させることで、やるせない悲哀を醸し出しているわけである。このモチーフ、主題、構成のいずれの点においても、独歩の作品がワーズワースの詩想に導かれて書かれたものであることは確かだ。それに対して、李光洙の「少年の悲哀」には思春期の青少年が抱く一種の恋愛感情をワーズワース風に描きあげようという趣向が認められるだけである。

第三に、両作品ともに田舎の叔父の家を小説の舞台として設定していることが指摘できる。李光洙の「少年の悲哀」の舞台は主に蘭秀の家。そこはまた文浩の叔父の家でもあるが、そこで蘭秀の結婚話を中心に物語が展開されていく。独歩の場合も主人公が八才から十五才まで、田舎の叔父の家で暮らした時の経験が物語の中心である。この共通性も無視しがたいであろう。

第四に、両作品はともに貧困や結婚制度などによつて引き裂かれた弟や従妹を想う兄弟愛を描いている。独歩の「少年の悲哀」は、少年の目から見た「青楼の女」の悲哀であるが、そこには悲しい姉弟愛が潜んでいる。「青楼の女」とその弟は両親と早くに死別して互いに支え合っていた。ところが、四年前、「青楼の女」の弟が十二才の時に、二人は別れ別れになって生死さえ分からない。しかも、彼女は三日後には朝鮮につれて行かれる運命である。「青楼の女」はもうこの世で弟に会えるかどうか分からないと思うと、せめて弟に似た主人公の少年に一目会い、生死の分からない弟の代わりに別れの言葉を告げたいと願い、その切ない思いを彼女のなじみの客がかなえてやる。一方、李光洙の「少年の悲哀」では、いとこ同士の文浩と蘭秀は互いに惹かれていた。ところが、蘭秀の両親は彼女の意志も聞かず、勝手にある金持ちの知恵遅れの少年と婚約させてしまう。文浩は封建的な結婚制度から蘭秀を救い出そうと八方手を尽くすが、結局、大人の考えを変えることができず、白痴の少年に嫁ぐ蘭秀を切なく見送ることになる。

このように両作品には貧しさ故に、あるいは封建的な結婚制度故に愛する弟や従妹との離別を余儀なくされた登場人物の切ない兄弟愛を扱うという

共通性が認められる。

第五に、小説の結末の共通性が挙げられる。李光洙の「少年の悲哀」の最後は、愛する従妹が知恵遅れの少年と無理矢理に結婚させられたことに堪えられず東京に留学した主人公が、その後結婚し、一児の父親になって留学先から帰ってきたところで、次のような文で結ばれている。

私を迎えてくれる従姉妹たちの中に蘭秀の姿はなかった。(中略)三年前の楽しみは永遠に過ぎ去ってしまった。文浩は泣きたかった。しかし、三年前のように涙が出ない。(中略)「ああ、僕たちももう親父だよ、少年の天国は永遠に過ぎ去ってしまった」と言うものの、目には涙をいっぱい溜めている。(一一七頁)

楽しかった少年の日々も、蘭秀との愛が終わったと彼が自覚した時、過ぎ去ってしまったのだ。かくて主人公の心に宿った悲哀の追憶は、甘美な涙と共に思い出されるという結びで作品は幕を閉じている。

一方、独歩の「少年の悲哀」では、主人公が十二才の時、遊廓で出会った薄幸の女の悲しみを、十七年経った今日でも、その夜の光景とともに忘れられないと語った後、次の文で結ばれている。

今はただ其時の心持を思ひ起こしさえ堪え難い、深い、静かな、やる背のない悲哀を覚えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の児の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何処の涯に漂泊してその果敢ない生涯を送っているやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静肅なる死の国に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。(四八三頁)

主人公も大人になり、徳二郎も結婚して二児の父親になったが、それでも「青楼の女」との出会いの追憶が心の中にいつまでも残っているという

結びには、李光洙の作品の結末と共通する抒情性が感じられる。

以上、五項目に渡って両者の共通点をみてきたが、その結果、李光洙の「少年の悲哀」はその題目や題材、主題などの点において独歩の影響を受けて執筆されたものと見なすことができる。ただ、李光洙の「少年の悲哀」は、聡明で愛らしい従妹にひそかに恋心を寄せていた文浩という少年が、父母の決めた知恵遅れの少年と結婚することになった従妹を救えなかったことに對してやるせない悲哀を感じるという内容の作品である。つまり、文浩の悲哀は早婚に象徴される因習的な結婚制度によるものであるという点において、独歩の「少年の悲哀」の主人公が感じたそれとは根本的なところで異なっている。この少年達が感じた「悲哀」を追求していくと、李光洙の独歩受容は、従来指摘されているような題材や主題、小説の舞台などといった表面的なものにとどまらず、作品の深層にまで及んでいたという事実が浮き彫りにされるのである。そこで次節では、少年達の「悲哀」の背景についてみていくことにする。

三、時代の「悲哀」としての「少年の悲哀」

木谷美紀枝氏は、独歩の「少年の悲哀」には「自分の力では運命を変え得ない女の悲しみ」と、「その女の悲しみを救えない男の悲しみ」、そして二人の悲しみに触れた「少年(僕)の心に生じた(言ひ知れぬ悲哀)の三つの悲しみがあると指摘しているが、実は李光洙の作品にも全く同じ「悲しみ」が存在する。すなわち、女子であるが故に学校に行かせてもらえなくても、勝手に知恵遅れの少年と婚約させられても、それを批判したり断つたりすることのできない儒教道徳に支配された女の悲しみと、その女を救えない男の悲しみ、そして、男尊女卑や早婚制度を押しつける「無知と非情」な大人の世界に組み込まれていくことになる無垢な少年の悲しみである。以下、作品に即して具体的に見ていくことにする。

その一、〈僕〉の「悲哀」

まず独歩の「少年の悲哀」から見ていくと、八才から十五才まで瀬戸内

海に面した叔父の家に育った主人公の〈僕〉は、ある日の夜、徳二郎という下男に誘われて海の涯まで見渡せる遊廓に行き、そこで一人の若い女に出会う。女が持っている弟の写真が〈僕〉に似ているところから、生死さえわからぬ弟に一目会いたいという女の切ない願いを聞き入れるために徳二郎が〈僕〉を連れてきたのである。

やがて、女は小舟を漕いで沖合の方に〈僕〉を連れ出し、両親に早く死なれたこと、たった一人の肉親である弟とも四年前に生き別れたこと、近いうちに朝鮮につれて行かれることになっていることなどを語った。〈僕〉は、天涯孤独になつて三日後には日本を離れて朝鮮に渡らねばならない、とすすり泣く女に対して返す言葉も見つからず、ただ黙っていた。そこに、徳二郎が酒を持って追いかけてきた。

徳二郎は十一、二歳の頃から叔父の家で雇われている二十五才位の身寄りのない青年である。同じ境遇の青楼の女と親しく付き合っていたが、彼女が唯一の肉親である弟とも生き別れて朝鮮に売られていくことにひどく心を痛めている。しかし、一介の下男の身の徳二郎には、女の朝鮮行きをどうしてやることもできず、三日後には見送らねばならない。徳二郎は、悲しみにうちひしがれている女の気持ちを少しでも慰めようと酒をすすめ、歌を歌つてやると言う。

『ハツハツハ、、、大概そんなことだらうと酒を持て来たのだ、飲みなく私が歌つてやる！』徳二郎は既に酔っているらしい。女は徳二郎の渡した大コップに満々と酒を注いで呼吸もせずに飲んだ。

『も一つ』と今度は徳二郎が注いでやったのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向けて酒気を吐いた。

『サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる。』

『イ、エ徳さん、私は思切つて泣きたい、此処なら誰も見て居ないし、聞こえもしないから泣かしてくださいな、思ひ切つて泣かしてくださいな。』

『ハツハツ、、、そんなら泣きナ、坊様と二人で聞くから』徳二郎は僕を見て笑つた。女は突伏して大泣きに泣いた、さすがに声は立て得な

いから背を波打たして苦さうであつた。徳二郎は急にまじめな顔をしてこの有様を見て居たが、忽ち顔を背け山の方を見て黙つて居る、(四八二頁)

しかし、女は思い切り泣かしてほしいと言つて号泣する。徳二郎は、声を押し殺し、苦しうに背をふるわせて泣く女の姿に、これまでの女の薄幸な生涯、貧しさ故に遊廓に売られて苦界に身を沈めて生きてきたのみならず、これからの過酷な人生、すなわち「転売に転売をかさねて朝鮮の各地を流れていつた」末に身寄りもないところで死んでいく、その数奇な境遇を垣間見る。だからこそ女の泣く姿を直視できずに背を向けてしまうのである。それまで陽気に振る舞っていた徳二郎が急にまじめな顔で黙り込むのを目の当たりにした〈僕〉は、「少年心にも」女を救えない徳二郎の苦悩と悲しみを感じ取つて「言ひ知れぬ悲哀」を覚える。

このように見てくると、木谷美紀枝氏の指摘のように「少年の悲哀」には自分の力では運命を変えることのできない女の悲しみと、その女を救えない男の悲しみ、そして二人の大人の切ない別れに触れた少年の「言ひしれぬ悲哀」がその底流に流れているのが分かる。

中島礼子氏は、「青楼の女」と徳二郎、そして少年の「悲哀」の根底に、「個人の力ではいかんともし難い」「当時の日本における貧しい現実のかかえる問題」を見出し、「朝鮮に連れて行かれる」女に対して、なすすべもなく別れねばならない徳二郎の「悲哀」と、それを感じ取つた「僕」の「悲哀」は「時代の『悲哀』」にほかならないという斬新な指摘を行い、それまでの「少年の悲哀」の解釈に新しい視座を切り開いた。

ところが、中島礼子氏よりも遙か以前に「少年の悲哀」を「時代の悲哀」として読み取っていた人がいた。それはほかでもない、韓国における最初の独歩受容者である李光洙である。李光洙は、「少年の悲哀」の中に、娼婦として朝鮮に流されていく下層社会の女の悲哀とその背後にある公娼制度という主題を見出し、そこから当時の韓国社会の抱える結婚制度の矛盾を浮き彫りにした同名小説「少年の悲哀」を執筆したのである。

その二、文浩の「悲哀」

それでは、李光洙の「少年の悲哀」とはどんな物語なのか。ヒロインの蘭秀は綺麗で聡明な少女である。その従兄である文浩は、従姉妹たちの中でもとりわけ文学の才能のある蘭秀を可愛がる。また、蘭秀をはじめ従姉妹達は学校での出来事を話したり、小説を読んでもくれたりする文浩が誰よりも好きだ。しかしながら、彼女たちは女子であるが故に学校へ行かせてもらえない。文浩は従姉妹にも教育の機会を与えてほしいと思うが、叔父をはじめとする大人達は「女の子が勉強なんかして何になるつもりだ！」と叱責するだけである。揚げ句の果てには十六才になったばかりのまだ幼い蘭秀を、本人の意志も聞かず勝手にある金持ちの息子と婚約させてしまう。

しばらくすると新郎となる者が知恵の足りない白痴だという噂が聞こえてきた。家中のものが皆心配した。とりわけ悲しんだのは文浩である。噂の真相を調べるために五、六里ほど離れた新郎宅を訊ねて新郎を見てきた文浩の父親が、

「ちよつと愚鈍なところもあるが、まあ、その方が幸せになるんだよ」と言つたのでどうとう婚姻は成立した。(中略)

文浩は泣きながら叔父に懇願した。しかし、叔父は「出来ないんだ。両班の家で一度承諾したことをもとに戻すことは出来ないんだ。これも皆蘭秀の運命だからね。」

「でも、両班の面子は暫時のことでしょうが、蘭秀のことは一生に關わる問題ではないでしょうか。一時の面子のために一人の人間の一生を台無しにするなんてあんまりです。」と、文浩は訴えたが、叔父は逆に腹を立てながら

「人の力ではできないんだ。」と言って二度と文浩の話を聞こうとしない。文浩は「両班の面子」というものが憎かった。そして、一人で泣いた。(一一二〜一二三頁)

新郎は重度の知恵遅れである。文浩は一人の人間の一生よりも家や家門、

両班といった社会制度を重んじ、新郎が白痴であるということを知りながら、蘭秀をその男に嫁がせる大人達の「無知と非情」を憎んだ。大人達を憎めば憎むほど蘭秀を救い出したいと強く思うのであるが、自らもまだ子供なので蘭秀をどうしてやることもできず、ついに結婚式を迎える。切羽詰まった文浩は蘭秀をソウルへ連れて行くこととするが、父母の命令には絶对的に服従してきた蘭秀にとつてその行為はあまりにも大胆なものだった。

翌朝文浩は叔父の家に行った。晴れ着に髪を結い上げた姿で部屋に座っている蘭秀を文浩はじつと見つめた。蘭秀は文浩の顔を見てすぐ頭を落とす。文浩は蘭秀の晴れ着姿と髪形の変わったことを見ると、何とも言い知れない悲哀と嫌悪を感じた。(中略) あんなに綺麗で才能のある娘をまるで玩具のように知恵遅れの男の足下に投げ捨ててその人生をだめにするかと思うと、家中の者が皆悪鬼のように思われた。自分に力さえあればあの悪漢どもを殴り倒し、あの群れの手の中で死んでいく蘭秀を救いたかった。(一一六頁)

文浩は愛する蘭秀を因習的な結婚制度から救い得なかったと思うと、何とも言えない悲哀を感じる。当事者よりも親の意志が優先される結婚制度と、能力があっても女子であるが故に学校へも行かせてもらえない男尊女卑の制度を頑なに守っている大人たちに、文浩は強く反発し、抵抗する。しかし、文浩の精一杯の抵抗は大人たちに通じず、蘭秀はその男に嫁いでいき、文浩は蘭秀を救えなかった自分の無力さをかみしめたまま留学の途につく。

やはり李光洙の「少年の悲哀」にも、自分では運命を変え得ない女の悲しみと、その女を救い得ない男の悲しみが、その底流にあるのが注目される。従来、李光洙の「少年の悲哀」は従妹との淡い恋が因習的な結婚制度によって破れた悲しみを、一児の父親になって追憶する作品と評されていた²³。だが、これまで見てきたように、文浩の悲しみは単に従妹との恋が破れたためではない。それは、従妹が白痴と結婚させられても、女だという理由で教育をうけさせてもらえなくても、どうすることもできない現実に

対して感じずにはいらなかった悲しみである。つまり、李光洙も独歩と同じく、少年の悲哀の背後に本人の意志とは無関係に親の取り決めがすべての因習的な結婚制度を見ていたのである。

以上の考察から、李光洙と独歩が描いた「少年の悲哀」という同名小説は、いずれも単なる少年時代の悲しい思い出を追憶するものではなく、その背後にそれぞれの社会が抱えている「時代の悲哀」を浮き彫りにしようとする作者の意図が見られるという点で共通性がある。

四、少年の「悲哀」の背後に潜む社会の陰影

ところで、北野武彦氏は、独歩の「少年の悲哀」は「不幸な現実に対してどうすることも出来ない悲哀を、無垢な目と心で捉え直すことを主眼としているため、「悲哀」の背後にある現実社会そのものの実体がほとんど描かれていない」と指摘している。確かに「少年の悲哀」には悲哀の背後にある現実社会についての具体的な事件にまつたく言及していない。「青楼の女」・「朝鮮に連れて行かれる」・「流の女」という言葉からそれがかるうじて垣間見えるだけである。しかし、中島礼子氏によれば、「少年の悲哀」が発表された当時、すなわち一八九〇年代は日本全国で廃娼運動が展開され、日本における娼婦の実体がメディアなどで大きく取りあげられた時期である。新聞や雑誌などを通じて娼婦への恐るべき搾取の事実を知った当時の読者は、「青楼の女」が「流の女」として「朝鮮に連れて行かれる」という文脈の中に込められた作者の意図を読み取っていたのではないだろうか。少なくとも李光洙の描いた同名小説「少年の悲哀」から読むかぎり、独歩の意図はしっかりと読者に伝えられたと見てよからう。

その一、「流の女」と公娼制度、そして廃娼運動

そこで、まず独歩の「少年の悲哀」に込められた作者の意図から見ていくことにするが、実は、これに関して独歩は次のようなことを語っている。

少年の悲哀は事実譚にあらず、作中の娼婦も若者も共に架空の人物

なり。されど娼婦だけは全くモデルなきに非ず。余が二十一二の頃豊後より東京に来る時なり。柳津に暫く滞在して、某の山に上るを日課としぬ。(中略)而して余は殆ど毎朝の如く此山上にて会ひたる女あり。十六七の、顔青褪めて背のすらりと高き少女なりき。友禪模様を置ける金巾の小袖を袂束なく着たる、昨夜の白粉が襟の辺に残り居れる、無論いかゞはしき種類の女とは一目にて知れたれど、面長にて睫毛の長き実に印象の深き顔の女にて、何時も御堂の白壁にもたれて、便りなき目遣ひに凝つと向ふを見詰めて立つて居るなり。

その女、余はそれ限り会はず。而も、名も所も素性すらも好く知らぬ其女のこと気がななりて、何時までも忘るゝ事能はざりき。今にても回想すれば、其梯ほつして、言ひ難き哀愁を覚ゆ。知れる者なら尋ねて話して見たいやうな気もするなり。後幾度かその女を描き見んと思ひしもならず、偶々『少年の悲哀』を稿するに当たり、その時の感じを表はさんと力めたり。

つまり「少年の悲哀」の中の女は、実は独歩が二十一、二才の時に柳津で見かけた娼婦なのだ。一目でいかかわしい商売だと分かるこの女のこと気がななっていた独歩は、女のイメージをずつと心の中で温め、一九〇二年に、朝鮮に売られていく「流の女」として造型したのである。この言説に注目した中島礼子氏は、この作品が一八九〇年代(明治三〇年代)に練り広げられていた廃娼運動と深い関連があり、『少年の悲哀』は、当時の社会への鋭い批評性を込めた小説とも言える(27)と指摘したのである。

明治になり、「文明開化」の美名のもとで文化や教育、社会制度がどんどん変わっていったが、遊廓だけは江戸時代と少しも変わらず、平然と人身売買が行われていたと、金一勉氏はその著『遊女・からゆき・慰安婦の系譜』(一九九七)の中で指摘している。氏によれば、親や身内によって遊廓に売られた無数の婦女子達は、明治政府の黙認のもとで吉原を皮切りに全国津々浦々の遊廓に散らばって芸妓や娼妓、酌婦として働き、中には台湾や満州、朝鮮といった海外にまで渡ったものも少なくない。このような事態を重く見た名古屋の宣教師モルフイをはじめとするキリスト教団体と廃

娼論者の島田三郎を社長とする『毎日新聞』などジャーナリズムが立ち上がった。娼娼運動を起し、その結果一八九九年から一九〇二年にかけて解放された娼婦の数は二千名に達した。ちょうどこの時期に独歩の「少年の悲哀」が創作されたのである。

独歩は、新聞や雑誌などで大きく取りあげられていた娼娼運動の流れに、若い頃柳津で見かけた娼婦のイメージを重ね合わせていたに違いない。なぜなら、独歩は「名も所も素性すらも好く知らぬ其女のこと」が気になり、何時までも忘るゝ事ができず、「後幾度かその女を描き見ん」と思っていたが、結局描けなかつたからだ。一八九〇年頃からメディアを通じて娼婦への恐るべき搾取の実態が浮き彫りにされるようになると、独歩は青年時代に出会った娼婦の行く末に思いを馳せずにはいられなかつた。だからこそ「少年の悲哀」を執筆した際に、その末尾を次のように締めくくっているのである。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何処の涯に漂泊してその果敢ない生涯を送っているやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静肅なる死の国に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。

(四八三頁)

前田愛氏は、この「流の女」に注目し、「流の女」は明治社会が作り上げた「からゆきさん」にほかならないと指摘している。

日本では江戸時代から公娼制度が発達し、親が娘を遊廓に売って生計を立てることは決して珍しいことではなく、また親兄弟のために苦界に身を沈めることを親孝行と見なす傾向すらあった。こうした風潮は文明開化が叫ばれる明治になっても依然として変わらず、その実態は江戸期の公娼制度と少しも変わらず、むしろ明治政府の黙認のもとに繁盛を極めていた。江戸期に発達した遊廓が明治期に一層繁盛した要因の一つに戦争をあげることができるといえる。戊辰戦争を皮切りに西南戦争、日清戦争、日露戦争をへて太平洋戦争へと、日本は近代にはいつて多くの戦争を行ったが、その際出征兵士の慰安と称して日本国内は無縁遠くは台湾、朝鮮、南洋にまで遊廓

を作り、娼婦を輸出していたからである。実はこの輸出先の主要中継地となったのが他ならぬ、朝鮮なのである。

一八七六年の日朝修好条規後、釜山や仁川、元山といった朝鮮の主要都市が次々と開港されると、西日本各地から商人や海運業者、白木綿業者が渡航した。そのうちこれらの業者とともに多数の日本人が朝鮮に移住するようになり、釜山など開港地を中心に日本人居留地が作られた。これらの居留地は日清・日露戦争をへて拡大し続けたが、問題は初期の渡航者のほとんどが独身男性なのである。彼らの中には風俗を乱す事件を引き起こすものも少なくなく、こうした男たちの息抜き場として居留民の多い釜山に「遊廓」の設置が許可され、それが儲かるとなると、東京の吉原遊廓が乗り出し、以後仁川、元山、ソウルなどの居留地に次々と遊廓が設けられた。これが朝鮮における公娼制度の始まりである。こうして作られた遊廓に、地理的に近い長崎県や山口県、熊本県など九州地方の貧しい家の女性たちが「からゆきさん」として渡つていったのである。

独歩は、日朝修好条規が締結された一八七六年から従軍記者として日清戦争に従軍する一八九四年までの約十八年間、萩、岩国、山口、舟木、平生、柳井と県下の裁判所に勤務する父について山口県の各地を転々として過ごした。六歳から二四歳という人生の中で最も多感な時期を過ごした山口時代は独歩の文学世界に大きな影響を及ぼし、それが「河霧」をはじめ「山の力」「帽子」「置土産」「帰去来」「少年の悲哀」など多くの作品を生み出したことは周知の事実である。中でも「少年の悲哀」では、山口県と朝鮮の意外なつながり、つまり貧しさ故に遊廓に売られた娘たちが各地を転々としたあげく身寄りのいない朝鮮にまで流されていくという明治社会の貧しい現実が描かれている。山口県は昔から「朝鮮成金」といわれる資産家が多く、独歩も「帰去来」で取り上げているように対朝鮮貿易が盛んな地域であったが、その一方では家計を助けるためにからゆきさんとして朝鮮や台湾は勿論、遠く南洋にまで売られていく娘達も少なくなかった。

こうした明治国家の陰影を敏感に感じとっていた独歩は、娼娼運動が絶頂期に達した一九〇二年、「文学」という器をかりてその実体を浮き彫りにしようとしたのではないだろうか。「少年の悲哀」はその抒情性もさること

ながら、「流の女」が、主人公の少年を通して肉親に、ひいては母国に別れを告げようとしたところに、その隠れた主題が読みとれるという前田愛氏の鋭い指摘³³は、「文学」と時代状況の接点を裏付けてくれる。

ただし独歩は、「少年の悲哀」を執筆するに当たってあえて公娼制度や廃娼運動についての具体的な言及を避けている。その代わりに朝鮮に連れて行かれることになった青楼の女がなじみの客の徳二郎に「私は思切つて泣きたい、此処なら誰も見て居ないし、聞こえもしないから泣かしてくださいな、思ひ切つて泣かしてくださいな」と言わせることによって、自分の力ではどうすることもできない社会の最下層に生きる娼婦の悲しみを浮き彫りにし、そのような女を救えない男の悲しみを際立たせている。だからこそ余計に作品の背後に潜む「時代の悲哀」が気になるのである。

その二、李光洙と早婚、そして啓蒙運動

一方、李光洙の「少年の悲哀」においてはどのようなことが言えるだろうか。一九〇八年夏、当時明治学院中等部に在学中の十七才の李光洙は、夏休みを利用して三年ぶりに帰省した故郷で、是非婿になつてほしいと懇願する病床の父の友人の願いを断り切れず、結婚する。しかし、式はあげたもののどうしても新婦を受け入れることができず、李光洙は新婦のもとを去つて東京に行つてしまふ。以後、妻への愛情が持てないまま悩み抜いた末、一九一八年に離婚する。この早婚と離婚は李光洙の文学世界に深い影を落とし、短編「無情」(一九一〇)、「少年の悲哀」(一九一七)長編『無情』(一九一七)「幼き友へ」(一九一七)「開拓者」(一九一七)「彷徨」(一九一七)「尹光浩」(一九一七)などの作品を執筆させたのだが、中でも「少年の悲哀」は早婚問題を真正面から取りあげて注目を浴びた作品である。

早婚は、子孫繁栄や労働力の確保のために近代以前の社会では古今東西を問わず一般的に行われていた風習の一つであるが、近代化によつて教育や就職などの機会が増えるにつれて次第になくなっていった。しかし、儒教倫理の根強い韓国では早婚の風習は一向に減らず、二十世紀半ばになつても依然として遊び盛りの十代前半の子供同士が結婚させられていた。婚姻当事者の意志が全く無視される、いわば強制婚の性格の強いこのような

早婚の風習は、当然ながら本人とその家族、さらには社会的に深刻な問題を引き起こした。とりわけ、まだ性的に未熟な幼い妻にとって結婚生活は苦痛以外の何ものでもなく、彼らの中には結婚の桎梏から逃れるために自殺を図つたり、放火や殺人など犯罪を犯したりするものも少なくなかつた。一九二〇年に創刊された『東亜日報』(一九二〇年四月〜一九四〇年八月強制廃刊、四五年十二月復刊)は、創刊直後から早婚による様々な弊害の記事を掲載し、健全な結婚文化の啓蒙を行っていたが、その一部を以下に紹介すると、次のようなものがある。

「八歳の幼い妻、夫の虐待で離婚を請求」(一九二二・一一・三)「姑の虐待で婦女自殺」(一九二二・二・二六)「幼い妻、実家に帰りたくて自殺」(一九二四・十・二七)「夫怖くて放火」(一九二八・五・三二)「貞操を疑われた幼い妻を生き埋め」(一九二九・三・十六)「婚礼日の慟哭騒ぎ—新郎は不具者」(一九三〇・一・八)「十七歳の新婦、夫を毒殺—夫の性的要求に堪えられず」(一九三〇・十・二二)「未熟な性関係?—結婚三日目に新郎を絞殺」(一九三三・十二・九)「結婚式を控えた新婦、逃亡」一九三四・三・十三

このリストからも分かるように、早婚の弊害は男性よりも女性に圧倒的に現われている。親の決めてくれた結婚相手に気にいってもえなかつたり、あるいは気に入らなかつたりして結婚生活に不満が生じても、男性たちは蓄妾制度などいくらでも逃げ道があつた。しかし、女性たちにはそのような逃げ場もなく、ただひたすら堪えるしかなかつた。結局、幼い妻たちは夫との性的不一致や婚家の虐待など出口の見えない結婚生活から逃れるために放火や殺人のような犯罪を引き起こすまでに至るのである。

このような状態を重く見ていた権友会をはじめとする女性団体や日本留学婦りの知識人、近代的な教育を受けた若者達が立ち上がつて早婚廃止運動を展開し、一九三〇年代頃から「早婚廃止同盟」の組織をはじめとする様々な啓蒙活動が行われるようになったが、これらの早婚廃止運動に強い影響を及ぼしたのが他にもない、自他共に啓蒙主義者として名高い李光洙

なのである。

李光洙は、結婚直後から愛情のない結婚生活に悩み、その感情が最も高まった一九一六年から一九一八年の間に、「朝鮮家庭の改革」「早婚の悪習」(共に一九一六)「婚姻に対する管見」(一九一七)「婚姻論」(一九一七)「子女中心論」(一九一八)などを執筆し、因習的な結婚制度への痛烈な批判を行う一方、自由恋愛や自由結婚をテーマにした小説を矢継ぎ早に発表し、新しい結婚文化の紹介と啓蒙につとめた。これらの論説と小説が親の取り決めによる結婚という形しか知らなかった若者たちの心をつかみ、社会に旋風を巻き起こし、やがて早婚廃止運動など反封建啓蒙運動へとつながっていったことはよく知られた事実である。

金榮敏氏は、その著『韓国近代小説史』(一九九七)の中で「少年の悲哀」は婚姻制度など朝鮮社会が抱えている古い因習や制度への大胆な批判活動の始まりを告げる作品であると同時に、長編『無情』(一九一七)とともに啓蒙主義に代表される李光洙の本格的な文学世界を開く作品である、とその文学史的意義を高く評価している。³⁶氏によれば、「少年の悲哀」は早婚廃止運動など、いわゆる反封建啓蒙運動のスタートを切った文学作品と言えるが、李光洙も、独歩と同じく、少年時代の悲しい思い出を描きながら、その悲哀の背後に自らの生きていく時代の悲哀、すなわち封建的な早婚制度のために自我が無惨にも押しつぶされる個人の悲劇を浮き彫りにしようとしたのである。

以上のように見ると、独歩の「少年の悲哀」における時代状況との密接な関わりは、その影響を受けた李光洙の同名小説「少年の悲哀」によってさらに浮き彫りにされたと見てよからう。独歩は一九一〇年代の追憶文学の流行に先立って、少年時代を回想する一連の「少年もの」を書いていく。しかも、一九一〇年代の多くの作家たちがただ追憶の世界に浸っているのに対して、独歩は朝鮮に流されていく「流の女」の運命を気遣うことによつて、その背後に横たわっている公娼制度に批判の目を向けていた。李光洙が独歩の「少年の悲哀」を受容したのは、この時代や社会に対する独歩の鋭敏な感覚と関心の方向性に惹かれたからにはかならない。

五、もう一つの「少年の悲哀」

ところで、独歩の「少年の悲哀」は「少年もの」の代表作といわれているが、「画の悲しみ」や「馬上の友」「非凡なる凡人」などのように純然たる「幼少年時追想の作品」ではなく、二十一、二才の頃の独歩自らの体験を「十二歳の少年」に託して「少年の時の悲哀の一ツ」として書き上げた作品である。³⁷ではなぜ独歩は青年時代に路傍で見かけた一人の娼婦を、十二才の少年に仮託投影し、少年時代の悲しみの一つとして回想する形をとったのだろうか。次の木谷喜美枝氏の指摘は示唆に富んでいる。

作者の目は、運命を変え得ない薄幸な人間の不幸な現実を悲しいと見たのであるよりは、そうした世界に触れさせられた少年が、おとなの世界を知ることによる悲しみに向けられていたと言うべきであろう。おとなの世界の悲しさを知る、人生を知る、とは、こどもの無垢な時代の終わりを迎えたということと同義である。それは誰もが通過することなのだが、ここにはその少年の日が失われていくことの悲しさが描かれていた。³⁸

木谷氏によれば、独歩の描きあげた少年の「悲哀」とは、単に無垢なる少年時代との決別を悲しむのではなく、問題はむしろ、矛盾と悲しみに満ちた大人の世界を知った少年が、そのような大人の世界に組み込まれていくことに対する悲しみ、つまり、少年時代から大人の世界へと、境界を越えるときに誰もが味わわなければならない悲しみと言えよう。実は、このモチーフこそ李光洙の独歩受容のもうひとつの理由にはかならない。

すでに見てきたように、李光洙の「少年の悲哀」は前半では文学をこよなく愛する少年とその従妹たちとの交流が描かれているのに対して、後半では一転して古い結婚制度への批判となつている。この後半の部分が強調されたために、「少年の悲哀」は当時の因習的な結婚制度を果敢に批判した作品として注目されてきた。確かに文浩と従妹たちとの交流が断たれた背景には、因習的な結婚制度が存在している。しかし、作者の意図は実は違

う処にあったのではなからうか。次の一文は私たちにもう一つの視点を与えてくれる。

三年前の楽しみは永遠に過ぎ去ってしまった。文浩は泣きたかった。しかし、三年前のように涙が出ない。文浩は向かい側に座っている従兄弟の文海の黒い髻を眺める。そして、自分の顎を触りながら、「文海、もう僕たちの顎にも髻が生えてきたよ」と言つて伸びてきた顎髻を引つ張りながら笑う。文海も今昔の念を抑えきれず鼻の下に黒く生えてきた髻を触る。従妹達も二人が髻を弄る様子を見て笑う。しかし、彼女たちは二人の笑いの本当の意味などわからない。

母が小さい二人の児を連れてきて文浩の前に置く。じつと文浩を見つめていた子供はワーと泣きながら母のところへ行つてしまふ。母は二人の子供を抱き上げながら

「この児たちももう三歳になつちやつたよ」という。文浩は一人が自分の児で、もう一人が文海の児であることは知つていながらも、どちらが自分の児なのかさっぱりわからず、泣いている児をしばらく見ていたが、自嘲的に

「ああ、僕たちももう親父だよ、少年の天国は永遠に過ぎ去つてしまった」と言うものの、目には涙をいっぱい溜めている。(一一七頁)

留学から帰つてきた文浩と、従兄を暖かく迎える従妹たち、そして談笑。「少年の悲哀」の最後の場面である。文浩と従妹たちが楽しく交流をするという点に限れば冒頭の場面と変わらないが、両者の間には明らかな違いがある。それは文浩と従妹たちがかつてのように心を通わせていないことだ。黒く生えてきた髻を引つ張りながら「僕たちももう親父だよ」と苦笑いする文浩と、その笑いの真意がわからない従妹たち、つまり彼らは少年と少女の関係から大人と子供の関係へと変わつていたのである。

よく知られているように、儒教を国とするかつての朝鮮では、目上の人、年長の者への絶対的な服従と礼儀が徳目とされてきた。子供たちは長い間「父母に死ねと言われれば、死なないうまでも死ぬふりくらいはしなければ

ばならない」ほど、大人たちの理不尽な暴力になすすべもない無力な存在であった。従妹の結婚を通じて「無知と非情」な大人の世界を知つてしまつた文浩は、彼らを「悪鬼」や「悪漢ども」と罵倒し、大人への不信感を募らせる。しかし、三年後の文浩を待つていたのはあれほどまでに嫌がつていた大人の世界への強制である。一児の父親になつた文浩は、「少年の天国は永遠に過ぎ去つてしまった」と自嘲し、矛盾に満ちた大人の世界に組み込まれたことを悲しみ、嘆く。

すでに繰り返して指摘しているように、「少年の悲哀」は従妹との淡い恋が封建的で因習的な結婚制度によつて破れた悲哀を、一児の父親になつて追憶する小説と言われてきた。しかし、文浩の悲哀は単に従妹との恋が破れたことに対する悲哀だけではない。それは、矛盾に満ちた大人の世界を知つた少年が、自分もまたそのような大人の世界に組み込まれていくことへの悲しみである。これはかつての韓国ではなかつた、まったく新しい見方である。

李光洙は、留学以来愛読していた独歩の「少年もの」、とりわけ「少年の悲哀」の主人公が、十二才の少年の時の体験、すなわち近く朝鮮に売られていく「青楼の女」と、彼女の朝鮮行をどうしてやることもできない男との「不器用なまでに哀切な別れ」に触れさせられて「少年心にも言ひ知れぬ悲哀」を覚えたことを、十七年経つても今なおあの夜の光景が忘れられぬと回想する最後の場面に、大人の世界に組み込まれていく者の悲しみを読み取つていたに違いない。すでに一部は引用したが、饒舌をいとわずいま一度引いてみる。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と覚えて居て忘れやうとしても忘れることが出来ないのである。今も尚ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はただ其時の僕の心持を思ひ起こしてさえ堪え難い、深い、静かな、やる瀬のない悲哀を覚えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の児の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何処の涯に漂泊してその果敢ない生涯を送っているやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静肅なる死の国に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。(四八三頁)

十七年後の(僕)は、青楼で会った女を「流の女」と呼び、その行方を「何処の涯に漂泊してその果敢ない生涯を送っているやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静肅なる死の国に赴いたことやら」と案じている。つまり、十二才の少年の時には決して理解できなかった「青楼」や娼婦、そして「朝鮮に連れて行かれ」た女の最後が、「憂き事しげき世」を体験し、二十九才の大人になった今では手に取るように分かるのである。この女の行方を案じる(僕)の心情とまなざしこそ、李光洙にもう一つの「少年の悲哀」を執筆させた理由にほかならない。

李光洙は、留学以来読んでいた独歩の「少年もの」を通じて、それまで大人の使い走り程度にしか思われていなかった少年たちが、実は無限な力と可能性を持った存在であるばかりでなく、無垢だからこそ古い価値観や因習、偏見に縛られず、新しい社会を切り開くことができるという考え方を知る。以後、彼は「長幼の序」に基づく儒教的少年観を真正面から批判する評論や小説を立て続けに発表し、新しい少年像を提示していった。その結果、「少年の悲哀」のような韓国近代文学史上はじめて少年時代から大人の世界へと越境する無垢なる少年時代を顕在化することに成功したのだ。しかしながら、自他ともに啓蒙文学者として名高い李光洙は、少年時代の喪失を悲しむ主人公を描く際にも、その悲しみの矛先を、早婚に象徴される古い結婚制度への批判に向けなければならぬという時代的制約から決して自由ではなかったと指摘せずにはいられないのである。

註

- (1) 高村光太郎「北原白秋の『思い出』」(『高村光太郎全集第七巻』筑摩書房、一九七六年)二八七頁。
 (2) 千葉俊二「追憶文学の季節」(『白秋全集』月報三六、一九八七年)

一三頁。

- (3) 千葉俊二、前掲註(2)に同じ。
 (4) 柄谷行人「児童の発見」(『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇年)一四一頁。千葉俊二「『日本児童文学名作集』(下)解説」(『日本児童文学名作集』岩波文庫、一九九六年)二九〇頁。
 (5) 北野昭彦「『少年もの』と『教師もの』の人間観的基盤」(『国木田独歩の文学』桜楓社、一九七四年)二〇三頁。
 (6) 李炯基「新文学八〇年概観」(『韓国文学概観』語文閣、一九八八年)一一八〜一二五頁参照。
 (7) 李炯基、前掲註(6)と同じ。一一六頁。
 (8) 崔柄宇「韓国近代一人称小説研究」(ソウル大学博士論文、一九九二年)八九〜九六頁参照。
 (9) 金松見「初期小説の源泉探求」(『現代文学』百十七号、一九六四年九月)。
 (10) 宋百憲「春園の『少年の悲哀』研究」(『大田工專論文集三輯』一九八六年)。
 (11) 拙稿、「若き韓国近代文学者の群像」(筑波大学文芸言語研究科平成八年度博士論文、一九九七年二月)八九〜九六頁。
 (12) 拙稿、「二人称叙述形式と『新しい人間の発見』の発見—国木田独歩『春の鳥』と田榮澤『白痴か天才か』」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第十九号、二〇〇五年)。
 (13) 拙稿、「愚者文学としての『春の鳥』—国木田独歩『春の鳥』と田榮澤『白痴か天才か』」(『比較文学』四五巻、二〇〇三年)。
 (14) 拙稿、前掲註(10)に同じ。
 (15) 中島礼子「独歩『少年の悲哀』—その作品世界をめぐって—」(『国士館大学紀要』一九八八年三月、後『国木田独歩—短編小説の魅力に再録』二〇〇〇年)。
 (16) 李光洙は、「多難たる半生の旅程」「李光洙氏との交談録」「無情を書く時とその後」といったエッセイと日記などを通じて独歩の諸短編集を読んだと述べているが、具体的な作品名については語っていない

- (16) 例えば、中期を代表する「春の鳥」は田榮澤の「白痴か天才か」へ、「女難」と「運命論者」は金東仁の「ベタラギ」と兪鎮午の「馬車」へ、「日の出」は李光洙の「献身者」、「少年の悲哀」は李光洙の「少年の悲哀」と兪鎮午の「滄浪亭の記」へそれぞれ影響を及ぼしている。これだけでもいかに中期の作品が韓国の留学生達に広く読まれていたことが窺える。
- (17) 国木田独歩「少年の悲哀」〔国木田独歩全集〕学習研究社、一九九五年）以後頁数のみ表記。
- (18) 李光洙「少年の悲哀」〔青春第八号〕一九一七年六月）以後頁数のみ表記。
- (19) 本多浩「少年の悲哀」〔国木田独歩〕清水書院、一九六六年）一五三頁。
- (20) 木谷美紀枝『少年の悲哀』〔国文学解釈と鑑賞特集 国木田独歩一九九一年〕。
- (21) 中島礼子、前掲書に同じ。
- (22) 中島礼子、前掲書に同じ。
- (23) 安承徳「少年の悲哀考—自叙伝的要素及び主題を中心に—」〔国語国文学〕七七号、一九七八年十二月〕。
- (24) 北野昭彦、『少年もの』と『教師もの』の「人間的基盤」〔国木田独歩の文学〕桜楓社、一九七四年）二〇三頁。
- (25) 中島礼子、前掲書に同じ。
- (26) 国木田独歩「病床録」〔定本国木田独歩全集第九卷〕八一〜八二頁。
- (27) 中島礼子、前掲書に同じ。
- (28) 金一勉「第六章、遊郭と女衞の世界」〔遊女・からゆき・慰安婦の系譜〕雄山閣出版、一九九七年）一三三頁。
- (29) 前田愛「陰画の街々」〔幻影の明治〕朝日選書、一九七八年）一〇四〜一〇八頁。
- (30) 金一勉、前掲書一一四頁。
- (31) 川村湊「妓生—もの言う文化誌」〔作品社、二〇〇二〕一七九頁。『ソウル都市物語—歴史・文学・風景』(平凡社、二〇〇〇)。一一七〜三六頁。
- (32) 桑原伸一『国木田独歩—山口時代の研究』(笠間書院刊、昭和四十七年) 一四一頁。
- (33) 前田愛、前掲書。
- (34) 柳承賢『旧韓末—日帝下女性早婚の実態と早婚廃止社会運動』(誠信女子大学校教育大学院一九九九年修士論文) 四六〜五六頁。
- (35) 柳承賢、前掲書。七二〜八〇頁。
- (36) 金榮敏「近代小説の完成I」〔韓国近代小説史〕ソル出版社、一九九七) 三八〇頁。
- (37) 北野昭彦『少年もの』と『教師もの』の「人間的基盤」〔国木田独歩の文学〕桜楓社、二〇〇四頁。
- (38) 木谷美紀枝、前掲書に同じ。

시대가 만든 「소년의 비애」 구니키다롯보 「소년의 비애」와 이광수 「소년의 비애」

정 귀련

구니키다롯보의 작품중에는 소년시대를 회상하는 것이 많다. 열거하면 다음과 같다.

「시상」 1898 「두 소녀」 1898 「사슴사냥」 1898 「첫사랑」 1900 「슬픈 그림」 1902
「소년의 비애」 1902 「반지의 별」 1902 「해돋이」 1903 「비범한 범인」 1903 「말
위의 친구」 1903 「산의 힘」 1903 「봄새」 1904 「울다가 웃다가」 1907

이 리스트에서도 알 수 있듯이 롯보는 초기에서 만년에 걸쳐 13 편의 「소년물」을 집필하였는데 특히 1902, 1903년에 집중적으로 나타나 있다. 이 시기는 롯보의 전 작가 생활 중에서 가장 충실한 집필시기로서 훗날 작가로서의 명성을 날린 제 2 작품집 『롯보집』(1905)과 제 3 작품집 『운명』(1906)에 수록된 작품은 전부 이시기의 것이다. 우연하게도 이 두 작품집이 당시의 한국유학생들에게 많이 읽혀졌다. 부모 형제를 떠나 낯선외국에서 생활하던 14, 5살의 어린 유학생들은 롯보의 「소년의 비애」 「봄새」 「말위의 친구」 「슬픈 그림」 등의 소설이 펼치는 작품세계에 자신들의 외롭고 서글픈 처지를 오버랩시켰다. 특히 「소년의 비애」는 가난한 집안사정 때문에 조선에 팔려가는 창부를 안타까워하는 소년을 다뤘다는 점에서 당시의 한국독자에게 친근감을 주었을 뿐만 아니라 이광수와 유진오에게 영향을 끼쳤다.

발표당시 일본문단으로부터 혹평을 받았던 롯보의 「소년의 비애」가 두 명의 한국작가에게 영향을 끼쳤을 뿐만 아니라 이광수는 「소년의 비애」(1917)라는 동명작품까지 집필하였다. 이 사실은 롯보문학의 재평가를 생각하는데 있어서 간과해서는 안될 문제라고 생각한다.

본고에서는 이광수가 왜 롯보의 동명소설 「소년의 비애」를 집필했는지 그 집필의도를 밝혀냈다.